

イチゴ高設栽培装置

農業研究センター 農産園芸研究所 野菜部

担当者：守屋 勝行

研究のねらい

イチゴ作は長時間にわたる労働、窮屈な姿勢での作業等の問題をかかえている。このため、高品質、安定多収でランニングコストが慣行栽培並の高設栽培装置を開発し、省力化・軽作業化を図る。

研究の成果

- 1 育苗は収穫株からの空中採苗を行うことにより親株床が不要になり、さらに、定植・収穫及び栽培管理等の省力化と作業姿勢の改善が図れる。
- 2 施肥は定植時植え穴直下の局所全量茎肥で、株当たり窒素分量については4gが適当である。
- 3 高設栽培は慣行栽培に対して栽植本数が35~40%増加するため収量が多く、高温期でも果実が硬く、糖度が高く、品質に優れる。
- 4 肥効調節型肥料の施肥により、普通育苗で9月5日~10日に花芽が末分化状態で定植ができ、さらに第1次腋花房の花芽分化調節ができ連続収穫が可能である。
- 5 本装置は熱電導性が高いため培地の地温は気温に対して2~5 高く推移し、培地の加温は不要である。

普及上の留意点

- 1 高設栽培装置は育苗と一貫体系で行い、培地を連続して使用する。
- 2 灌水はテンションメーターを設置してpFl.6を灌水点とする。
- 3 梅雨明けにハウスを10~15日間密閉し、培地を太陽熱消毒する。
- 4 冬期の昼温は慣行栽培より2~3 高く管理し着色を促進する。



図1 装置の概要

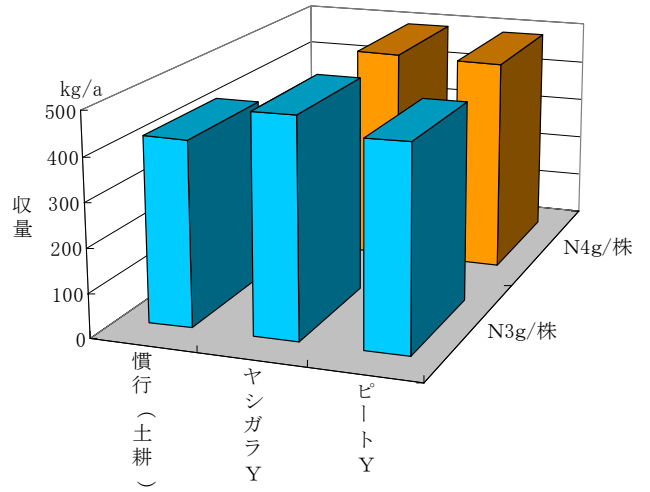


図2 総収量

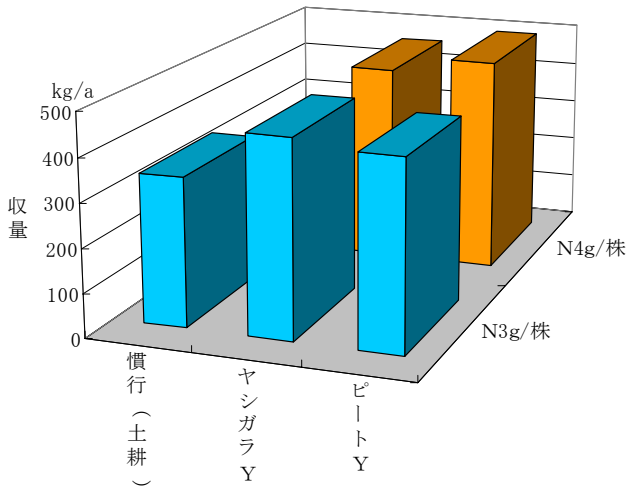


図3 培地の違いによる商品果収量

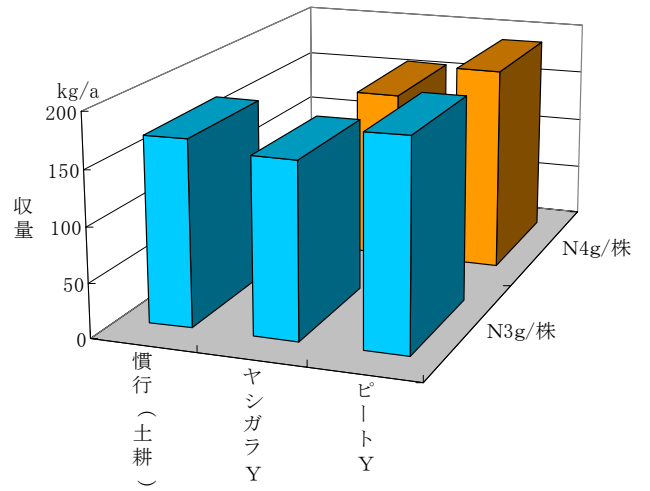


図4 培地の違いによる早期収量



写真1 茎肥全量施肥



写真2 収穫状況 (H10.12)